

私塾 明王院

みようおういん

明王院は江戸時代末期の安政5年（1858）、修験者であった外鯨とくじらかなんど要人が、下徳次郎宿に開塾した私塾（寺子屋）である。

「学問がなければ立派な人間にはなれない」という信念で始めた私塾は、2代塾長外鯨ゆうき結城、3代塾長外鯨みのる升と続き、大正10年までの約60年間存続した。主に農閑期を利用して、



13歳から18歳頃までの若者たちに対し、読書や習字、日本外史、四書五経などの学問を、自宅2階の大広間で教えた。生徒は徳次郎を始め、近隣の村々から入塾し、当塾で薫陶くんとうを受けた者は500余名に及んだ。外鯨家の門を入ると、3代塾長であった外鯨升の恩に報いるため、門下生が昭和26年に建立した「謝恩之碑しやおんのひ」が建っている。

初代要人は、戊辰戦争後の下野国の世情安定を目的に組織された「利と鎌隊がま」に加わり、新政府軍の一員として活躍したことで知られる。



富屋地区まちづくり連絡協議会 令和2年建立